

国際基督教大学教授 国連大学客員教授
高橋一生

グローバリゼーションという課題は、企業の立場からは、一方でリストラを余儀なくされ、他方で雇用創出の責任を負うというジレンマがある。市場を中心としたグローバリゼーションでは、雇用を伴わない成長、賃金にしわ寄せが来る成長が展開しかねないこの課題にどう対処するかが議論の中心であった。

1. グローバリゼーションを、ディーセント・ワークに焦点を当て、より望ましいものにするには、ローカリゼーション（地方レベルを主体にすること）の努力が必要である。グローバリゼーションとローカリゼーションは相反する概念ではなく、補完関係にある。
2. 今までの経済学は量の科学であったが、質の科学にもっていく努力が必要だ。その一環として「仕事の質」もモデル形成の上で重要である。
3. 今までのグローバリゼーションのプロセスでは、人が仕事の方に動くという色彩が強く、人の動きに関してはいろいろな制約があり、これがジレンマでもあった。これからは仕事を人の方に動かすという工夫をする努力が必要だ。
4. ディーセント・ワークには共通する原則があると同時に、社会的・文化的にかなり異なる内容であることも多く、それに対して感性を働かせたものの見方をする必要がある。
5. 地域についても雇用創出における比較優位があるはずで、これを活かし、国がサポートする仕組みが必要である。
6. 企業は競争力を高めるために、より質の高い従業員を確保する必要があるが、そのためには広い意味での教育が従来以上に重要となってきた。
7. グローバル化のもとでは、社会的弱者に対する特別な配慮が今まで以上に必要となる。特別な配慮は国単位で行うのみならず、国際的なアプローチ、国際的なソーシャルセーフティネットも考えていく必要があるのではないかと。